

氏 名 山本 睦

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 215 号

学位授与の日付 平成24年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域  
社会における社会成員の活動と戦略から—

論文審査委員 主 査 教授 印東 道子  
教授 關 雄二  
教授 野林 厚  
教授 井口 欣也 埼玉大学  
教授 大平 秀一 東海大学

## 論文内容の要旨

本論の目的は、考古学データの分析を通じて、ワンカバンバ川流域におけるアンデス文明形成期（紀元前 3000—50 年）の社会動態を明らかにすることである。その際、社会動態を流域社会内部の動態と外部社会との地域間交流の動態の両面が絡み合う通時的な変化の諸相として捉え、その背景に存在する行為主体である社会成員の活動と戦略を検討する。

形成期において社会的統合の中心とされる神殿で行われる諸活動には、それを支える経済的、政治的活動が不可欠であり、そこには当該社会やそのリーダーといった人々の戦略が反映すると想定される。本論では、神殿をめぐる考古学データの通時的変化と地域間比較研究、GIS（地理情報システム）を分析手法として、リーダーの特質や彼らによるイデオロギーの操作、他の成員との社会的差異の出現、および地域間交流の実態を明らかにして、ワンカバンバ川流域社会を実際に動かした人々の行為や戦略を検討する。

本論は全 12 章で構成される。

第 1 章では、研究目的を述べ、研究方法と理論的背景を整理して、本研究の問題意識と理論的位置づけ、およびその意義を明確にする。

第 2 章では、アンデス各地でみられる神殿を中心とした多様な社会展開について、神殿をめぐる諸活動のほか、遺構や遺物といった物質文化から推定される地域間交流から総括し、それらの問題点をあげて本論の位置づけを明確にする。

第 3 章では、本論の基軸となるインガタンボ、およびワンカバンバ川流域における調査・研究設立の経緯とその概略を述べる。

第 4 章から第 7 章では、インガタンボの特徴を建築、土器、人工遺物や自然遺物の分析から検討した。建築を扱った第 4 章では、ワンカバンバ期（紀元前 2500—1200 年）、ポマワカ期（紀元前 1200—800 年）、インガタンボ期（紀元前 800—550 年）にわたって儀礼的増改築「神殿更新」を繰り返すことで、インガタンボの神殿が自然の丘陵を利用した小神殿から大規模化する過程を明らかにした。

第 5 章では、土器のタイプ分類にもとづいて編年を確立するとともに、時期ごとの特徴を論じた。また、ポマワカ期の土器出現以後、時期をおうごとに出土量とタイプ数が大幅に増加することを明らかにした。

第 6 章では、石器、貝製品、土製品、骨角器について検討した。とりわけ威信財となりうる海水生種の貝製品がポマワカ期以降で増加する点は、第 7 章で論じられる海生資源や荷駄獣であるラクダ科動物、儀礼にも利用されるトウモロコシの出現時期と一致する。また、第 7 章では、多様な環境を利用した食料基盤の存在についても論じた。

第 8 章では、インガタンボ出土資料を周辺地域の先行研究と比較検討して、その差異や類似性からインガタンボを中心とした地域間関係について論じた。インガタンボ期に入ると、それまで北部熱帯低地や極北部海岸との交流を重視していた人々が、それらに加えて北部海岸や北部山地との関係を強く意識しはじめる様相が明らかとなった。

第 9 章では、流域内のセトルメント・パターンの通時的変化から、ワンカバンバ期にはインガタンボのみで認められた神殿建設が、ポマワカ期に隣接地域へ抜ける地域間ルート上で同時多発的にみられた後で、インガタンボ期には再びインガタンボへと収斂する過程を明らかにした。これは、地域間交流が、神殿や神殿を支える社会を大規模化するうえで

重要な要因であった可能性を示唆する。

第 10 章では、GIS による最小コストルート分析を通じて、ワンカバンバ川流域を中心とした地域間主要ルートの全体像とその変遷を検討した。ワンカバンバ期まで周辺地域間との交流にさほど関与していなかったインガタンボは、ラクダ科動物の導入によって移動手段とルートが変化したポマワカ期に入ってはじめて、地域間交流網に組み込まれたと考えられる。

第 11 章では、前章までに提示した一次データと、その分析結果である二次データを総合して、ワンカバンバ川流域社会の動態を明らかにし、その背後に存在する社会成員の活動と戦略を空間的に三つのレベルから考察した。

インガタンボにおいて神殿をめぐる諸活動は、とくにリーダーによって積極的に実施された。ワンカバンバ期まで社会成員の紐帯を図り、社会を維持するための契機であったそうした行為が、ポマワカ期以降になると社会的紐帯の強化だけでなく、リーダーの戦略を他の成員に知らせ、集団内の社会的差異を認識させて不平等を覆い隠すとともに、その権威を正統化する契機や手段となったためである。

この際に重要な作用をおよぼしたのが、地域間交流であった。事実、それが活発化するポマワカ期には、神殿の流域内併存や神殿と居住域、あるいは耕作地間の空間分化が生じる。また、併存していた神殿群が、インガタンボが極大化して流域内の社会統合の核となるとともに姿を消す現象は、地域間交流に関するインガタンボの発掘データと相まって、物資や情報の獲得や利用が流域の社会動態に与えた重要性を強調する。

この地域間交流のあり方を大きく変えたのが、ポマワカ期以降に出現するラクダ科動物の利用とそれによる地域間ルートの変化であった。インガタンボの人々、とりわけそのリーダーは、これを積極的に利用することで、流域社会における立場を確立することに成功したのである。もちろん、そうしたリーダーの活動や戦略は、周辺地域社会との関係性のなかで、状況に応じて時期ごとに変化した。

第 12 章に述べる結論は以下の通りである。

インガタンボ、およびワンカバンバ川流域では、神殿における更新と儀礼が社会変化に一定の役割を果たした。そのなかで、イデオロギーの普及装置としての神殿とそれをめぐる諸活動は、社会的秩序を構造化することで、社会的差異を成員に認識させると同時に差異を創出し、維持させる契機や手段となった。

また、神殿で行われる諸活動や集団内での社会的差異を維持、顕在化するうえで、地域間交流は、イデオロギーと関わる外在の知識や物資、あるいはその製作技術へのアクセス手段として重要であった。そのため、地域間交流は、インガタンボの人々の戦略として重視されたのである。

とりわけ、ラクダ科動物の利用とともに生じた地域間ルートの変化は、ルートの結節点となるワンカバンバ川流域、とくにインガタンボにおいて、階層化の萌芽を含む社会組織の変化をもたらした。つまり、流域社会の変化に際して、神殿における諸活動と地域間交流の相互関連こそが重要であったことが指摘できるのである。

しかしながら、このような状況のなかで、地域間交流とその社会的、政治的、経済的役割は、決して静態的な事象ではなかった。形成期後期になって、地域間交流が質的に変化すると、周辺地域社会の動向に応じて外部社会の影響をうけつつも、インガタンボ社会も

自らの位置づけを主体的に変化させた。こうして、地域間交流を介して、周辺地域の社会とイデオロギー、経済、技術的背景を共有していても、ワンカバンバ川流域では独自の社会展開が生じたのである。

総じて、インガタンボやワンカバンバ川流域でみられた社会変化とは、当該地域独自の展開でも周辺地域社会の影響下で一元的に引き起こされたものでもなく、おかれた状況に積極的に関与した在地の人々の能動的な対応と、所与の社会的状況、および生態環境を利用した戦略の結果であった。

本論文の目的は、南米アンデス文明における形成期（B. C. 3000～B. C. 50 年）の社会動態に注目し、神殿遺跡の発掘と遺跡分布調査から、文明初期にみられる権力の発生を論じることにある。

今日のペルーからボリビアにかけての中央アンデス地帯では、農耕定住、あるいは漁労定住が開始される形成期に数多くの大規模な神殿が築かれ、社会の統合や変化の中心として機能したと考えられてきた。著者の研究もこの流れにあり、ペルー北部山地のワンカバンバ川流域に位置する神殿遺跡インガタンボを発掘し、遺構と遺物の分析、流域一帯の遺跡分布調査、流域外の考古学データとの比較などを通して、対象社会の変化を内外の要因で説明しつつ、その変化を生み出した人間や集団の主体的行動を読み取ろうとしている。

本論は 12 章からなる。第 1 章では、ペルー考古学における形成期研究を著者の関心に沿って批判的に整理しながら、本論文の視点を提示する。とくに、従来形成期研究では、遠く隔たった神殿間の比較研究に明確な方法論が見当たらない点、地域間の交流を担った人間の具体的な行為とその戦略が論じられてこなかった点が強調される。

第 2 章では、エクアドル南部とペルー北部を扱った先行研究をまとめ、第 3 章では、インガタンボ遺跡を調査対象に選定した経緯を述べる。第 4 章から第 7 章までは発掘調査データの提示にあてられており、第 4 章では発掘調査に基づくインガタンボ遺跡の遺構データが示される。第 5 章では出土した土器の分類方法と時期的変化について述べられ、第 6 章では、石器、骨器、貝器などの遺物、第 7 章では、動植物遺存体の記述が行われる。この結果、インガタンボ遺跡ではワンカバンバ期（形成期早期～前期）、ポマワカ期（形成期中期）、インガタンボ期（形成期後期）という 3 つの時期が示される。

これらのデータは第 8 章以下で詳細に分析される。まず遺構と遺物の特徴をもとに、ワンカバンバ川流域外のデータとの詳細な比較を行って地域間交流の変化を論じる。第 9 章では、ワンカバンバ川流域内の社会動態を遺跡分布調査から明らかにし、これを既述の地域間交流のデータと総合することで、複数の交流のルートを一時的に推定する。さらに GIS を用いた最小コストルート解析を行い、地形学的、生態学的な条件が適していると考えられる遺跡間ルートを示したのが第 10 章である。

第 11 章では、前章までに得られたワンカバンバ川流域の社会動態を、神殿を中心とした活動や地域間交流に携わった人々が採用した戦略という観点から捉え直し、第 12 章の結論でその総括を行う。

以上の論をまとめると、インガタンボ遺跡ではワンカバンバ期に小型の基壇が出現するものの、流域には他の神殿は見当たらず、流域外との地域間交流も希薄であった。これがポマワカ期になると、高低差を持つ数段の基壇が現れ、流域内には複数の神殿が林立するが、規模と複雑さの点でインガタンボ遺跡が他を凌駕していた。この時期、暖流系の貝がもちこまれ、類似した土器が見つかるなど、とくにペルー極北部海岸やペルー北部熱帯低地・エクアドル南部熱帯低地との交流が目立つ。最後のインガタンボ期になると、流域内の神殿は姿を消す一方で、インガタンボ遺跡は巨大化、複雑化を遂げる。地域間交流は変化し、北部山地や北部海岸を重視するように変化する。こうした変化は、エクアドルや熱帯低地と中央アンデス地帯とを結ぶルート上にある利点を活かし、流通物資とその手段を

統御しながら権力を蓄えるという、リーダー達の戦略の変化のあらわれでもあると結論づける。

本論文は、以下の点で高く評価される。

まず、個人で取り組むには困難な神殿遺跡調査に果敢に挑戦し、長期間にわたる発掘調査の結果、本論を支えるのに十分な一次資料を入手した点である。フィールド科学である考古学研究を遂行する能力の高さを十分に示すものである。

また研究対象地域は、アンデス文明が成立した中央アンデス地帯の北限に位置し、遺構や遺物の分析から異なる文化が存在したとされるエクアドルに接している。地政学的に重要な場所であるにもかかわらず、これまでアンデス考古学研究では辺境として等閑視されてきた。この地に光を当て、そこで活動する人間の視点から異文化接触の実態と変容を明らかにした点は重要である。

さらに方法論としても、遺跡間の比較が、しばしば遺構や遺物の断片的な比較に陥りやすい点を克服しようとした試みには高い評価を与えたい。筆者は、遺跡と周辺地域の踏査から、対象地域内の社会動態を押さえ、次に遺構や遺物の体系的比較を通して他地域との関係性を推定し、具体的な人間の移動ルートを提示している。さらにこれを神殿の活動に関与していたリーダーによる社会内部の差異化を目指す戦略として位置づけた点は、人間の具体的実践に触れず、物質を語ることで社会を語りがちなアンデス考古学研究のレベルを飛躍的に高めるものである。

ただし、本論文にまったく問題がないわけではない。重要な先行研究と先端的研究の動向を着実に押さえ、さまざまな分析概念を援用してはいるものの、自身の持つ具体的なデータの厩大さ故に、それを解釈と議論の組み立てに十分に活かすきれなかった点は惜しまれる。

また地域間交流は無数の集落や中核地を結ぶネットワークの集合であるため、一研究者の発掘から得られる一次資料ですべてをカバーすることには限界があり、本論文で行っているように既存の発掘資料を用いて論を進めたのは妥当である。しかし、今後の研究展開としては、他の遺跡や地域において、さらなる資料収集を行うことで、より精緻な検証作業を進めることが望ましい。

こうした点は今後の課題として残るものの、精緻化された方法論に基づき、社会動態と地域間交流との相互作用を明らかにした筆者の研究は、アンデス考古学における形成期研究を新たな地平へと導く可能性を秘めていることはまちがいない。

以上の点から、審査委員会は全員一致で本論文が博士学位論文に値すると判断した。